

英語教師のための英文法 (1)

English Grammar:

An introduction for second language teachers

(1)

府川 謹也

Fukawa Kin-ya

0. はじめに

日本人英語学習者にとってもっとも習得が難しいのは冠詞と前置詞であるとよく言われる。しかしそうした通説で忘れられていることに、スル的言語¹⁾である英語ではその一大特徴をなしている他動性という概念が作動し、いろいろな文法現象となって現れ、しかもそこには或る一定の意味的特徴がある、ということである。周知のごとく、事態を描写する際日本語では、(1a) のように行為者を表面に出さずに、あたかも<自然の成り行きでそうなった>というふうにつけて表現するが、英語では(1b) のように<個体が或る行為をする>というふうに行為者を際立たせるように言い表す。

- (1) a. 私たち、6月に結婚することになりました。[結婚する当事者が自分たちを取り囲む環境に埋没し、その環境が移り変わっていくことにつれ、自分たちの結婚という出来事が、それを取り囲む周囲と一体化して起こると表現する]
b. We're going to get married in June. [当事者が自らの意志で結婚をする行為者として表現する]

さらに、行為者がいないと考えられる場合であっても、(2b) のように行為者を仕立てることがある。

- (2) a. 冬になった。[話し手が置かれた季節が変化の主体であるが、それがはっきり表現されていない]
b. Winter has come. [冬という季節が「来る」という行為の主体者として表現されている]

このような発想をする英語は、(3) のように事態を構成する参与者 (participant) ひとりだけで完結する活動を自動詞構文で表し、また(4) のように物理的ないし精神的な働きかけだけをする行為や、(5) のように働きかけたうえで影響を及ぼす行為を他動詞構文で表し、

- (3) a. The rabbit ran away in fright.
b. He has been sneezing all morning.

1) 池上嘉彦 (1981) や安藤 (1986) らを参照のこと。

- (4) a. He kicked the wall.
b. She praised him for his courage.
- (5) a. He broke the vase.
b. You're going to kill yourself on that sports car.

さらに、働きかけを受けた目的語がどのように変化したのかを、次の斜字体のようなかたちで示すことのできる結果構文を発達させた。

- (6) a. He kicked the door *open*. (彼はドアを蹴飛ばして開けた)
b. The hunter shot the bear *to death*. (ハンターは熊を撃って死に至らしめた)
- (7) a. He talked her *out of smoking*. (彼は彼女を説得してタバコをやめさせた)
b. She ran her Nikes *threadbare*. (彼女は自分のナイキの靴をボロボロにするまでランニングをした)
c. He sneezed the tissue *off the table*. (彼はくしゃみをしたらテーブルにあったティッシュが飛んでいってしまった)
d. He talked himself *hoarse*. (彼はしゃべりすぎて声がかれてしまった)

そして、結果をもたらすには働きかけが強くなければならないのであるから、英語が結果指向の強い言語であるということ²⁾は、事態を<働きかけ>という他動性の観点から見る傾向にあると言える。そして注目すべきは、いわゆる自動詞が他動性 (transitivity) を有してSVOの連鎖を成して用いられていることである。つまり英語は、自動詞がいわば他動詞になってしまうくらい<スル>的な言語であるということになる。

このように、いわゆる自動詞が一定の条件を満たせば他動性を獲得してSVOの型をとる事例はほかにもある³⁾。

- (8) a. She looked at me.
b. She looked me in { the face / the eye }.
- (9) a. We talked { to them / about business }.
b. Don't talk { business / politics } at table, please.

次節以降では、ともすれば見損なわれがちな英語における他動性が働いている現象をいくつか取り上げ、英語教師として指導上心得ていなければならないと思われる要点を述べていく。

2) 英語が<結果>重視の言語で日本語が<過程>重視の言語であることについては、影山 (1996) を参照のこと。

3) いわゆる The dog broke the pot. ⇔ The pot broke. のような自他交替 (transitivity alternation) というわけではない。

1. 「他動詞」の定義は難しい

或る動詞が他動詞と分類されるか自動詞と分類されるかを簡単に決めることができないのはよく知られていることであるが、以下で具体的に見ていこう。

次のような例で用いられる動詞は形式上直後に目的語を取って主語+動詞+目的語（以下 SVO）という型をとるという点では共通しているので「他動詞」と分類されるかもしれない。

- (10) a. [_S The teacher] [_V punished] [_O the student].
 b. [_S He] [_V left] [_O his estate] to his daughter.

そして確かに (11) のような例は、ともに対応する受動文が容認されることから⁴⁾、そこに現れる動詞は他動詞と見なされよう。

- (11) a. The student was punished by the teacher.
 b. His estate was left to his daughter.

しかし、同じ leave であってしかも SVO という同じ型を取ったとしても、対応する受動文がある場合とない場合がある。

- (12) a. *New York was left a year ago (by John).
 b. Only a little was left.
 c. An old man was left in a broken-down car for five hours.

つまり、同じ動詞であってもそれが他動詞として使われるか自動詞として使われるかは、leave がどのような意味で使われるかによるということになる。そして、同じことが他の動詞についても広く当てはまる。

- (13) a. *We are being approached by winter.
 b. *I was approached by the train. [ホームで電車を待っている状況で]
 c. I was approached by a man I didn't recognize.
 (14) a. *The army was deserted by Private John.
 b. The army was deserted by its commander-in-chief.

4) ここでは、受動文になり得るのは、のちほど述べられることであるが、その受動文の主語（すなわち対応する能動文の目的語）が動詞の表す行為によって影響を受けるという受影性 (affectedness) の制約 (Bolinger 1977) が働いているという前提で話を進めている。「他動詞」を特徴付ける他動性という概念を厳密なかたちで定義づけずに話を進めるのは好ましいことではないが、本論の対象が言語学を専門としていない英語教師を想定していることからお許し願いたい。

- (15) a. *Many friends are had by Mary.
b. This kind of pen can be had easily.
- (16) a. ??/**Hamlet* was read by John last night.
b. *Hamlet* was read even by John last night.
- (17) a. *Novels are written by John.
b. The book was written by Hemingway.
- (18) a. *Funny things are said by John at parties.
b. Funny things are said at parties.
- (19) a. The moon was reached for the first time in 1969.
b. *Tokyo Station was reached by Sam.
- (20) a. Our room was entered by someone with a key and money was removed from our supposedly safe box.
b. *The lecture hall was entered by the professor on time.
- (21) (*) Alice is resembled by Jack. [ジャックが不義の子であれば容認される]

こうして見てくると、或る動詞がSVOという型の構文に現れるからといって、その動詞を一義的に他動詞であると決めつけることはできないことがわかる。つまり、他動性という概念は、形式的観点から見た統語構造上の特徴だけで捉えることは難しい概念であるということである。実際、動詞の直後に隣接したかっこうで「目的語」が来なくとも受動文として容認される例はたくさんある。

- (22) a. I don't like to be waited for.
b. The store can be run to in a matter of minutes.
c. I don't like to be told lies about.
d. These people have never been done anything { for / against / to / about }.
e. To be eaten potato chips in isn't the best thing for a bed.
f. This glass has just been drunken beer out of.
g. This tool has never been used for its main purpose — in fact it's never been done anything with at all.
- (23) a. This bed was slept in { too much / by Napoleon }.
cf. *This bed was slept { in by John / near / under }.
b. This lake is not to be camped beside by anybody!
cf. *This lake was camped beside by my sister.
c. The bridge has been walked under by generations of lovers.
cf. *The bridge was walked under by the dog.
d. Washington has been lived in by many famous dignitaries.
cf. *Washington has been lived in by Mary.
e. The rooms weren't made to be walked through by every Tom, Dick, and Harry.
cf. *The room was walked through by the boy.
f. This oven hasn't been baked any cakes in yet.

cf. *This oven has been baked meat pies in already.

(Bolinger 1977)

これらの例で共通して言えることは、容認されるいずれの例も、Bolinger (1977) が言うところの「受動文の主語 (すなわち対応する能動文の目的語) が動詞の表す行為によって本当に影響を受けるという真の意味での受動者 (true patient) でなければならない」という受影性 (affectedness) の制約が働いているということである。例えば、(22c) では不定詞の主語である話者が自分の事で嘘をつかれれば心理的影響を被るであろうし、(22f) ではビールを飲んだ形跡がコップに残っているであろうし、(23a) では頻繁に使われるベッドは相応の物理的影響を被るのが自然である。また、一般的に言えば、或るモノが物理的影響を受けて変化すれば、その変化した跡があることは同類の他のモノと識別 (区別) できる特徴となると考えられる⁵⁾。このような観点から (23c) を見れば、問題の橋は元々もっていた特徴が変わるという一種の影響を受けていると理解できる。それはたとえば、何世代にもわたって恋人同士が特定の橋の下を散歩道として選べば、いつの間にかその橋のイメージが変わり「恋人橋」のような別名で呼ばれるようになる、ということである。このように、他動性というのは、働きかけを受ける側から言えば、程度の差があるにせよ<受影性>のあること、またそれを逆にして、働きかける側から見れば、同じく程度はまちまちであるにせよ<影響力の行使>が中心的構成要素となる概念である、ということが言えそうである。

2. 同じ動詞の他動詞用法と自動詞用法

前節では、文がSVOという他動詞構文と言われる構造を成しているからといって、動詞の表す活動がOにたいして<働きかけをする>という他動性を有するとは必ずしも言えないことを示した。しかし、だからといって、SVOという形式上の特徴に他動性が見出されないかという点、それもまた事実と異なる。次のように、同じ動詞がその直後に目的語だけをとるか、あるいは動詞と目的語との間に前置詞をとって自動詞的に使われるかでは、やはり大事な意味の違いが生じる。

(24) a. She looked at me.

b. She looked me in the face.

5) 例えば、誰かが茶碗の縁を欠いた (という物理的影響を与えた) とすると、その茶碗 (chipped cup) は「縁が欠けている」という特徴を有するようになったゆえにほかの茶碗から区別されると言える、ということである。

なお、こうして見ると、Takami (1992: 126) が言うところの疑似受動文にたいする特徴付けの制約 (Characterization Condition for Pseudo-Passives) は、Bolinger (1977) の受影性制約から拡張されたものと見なされよう。

さらに、叙述的に用いられる形容詞の典型的機能は主語の特徴付けを行うことであるが、この点で、動作性のない状態受動文に現れる過去分詞が「形容詞的」用法と呼ばれることには納得がいく。

(24a) では彼女の視線が話者に向けられただけであるが、(24b) では「まじまじと/真剣に/まともに見た」という意味になる。それゆえ、愛しているかどうか問い詰める場合は、声の調子が同じであれば (25a) よりも (25b) のほうがよりいっそう真剣であることが相手に伝わる。

(25) a. Look at me and say you love me.

b. Look me in the eye and say you love me. (まともに私の目を見て愛していると言ってちょうだい)

以下に、同じく典型的には自動詞的に使われる動詞が、直後に目的語をとって他動詞的に使われる例を挙げておく。

(26) a. The king looked { death / his enemy } in the face. (死/敵にまともに立ち向かった)

b. Don't look a gift horse in the mouth. (もらい物のあらを探すな)

(27) a. Don't talk politics or religion at the dinner table!

b. He talks { nonsense / sense / a lot of sense }.

c. You always talk and think business every day.

(28) a. I can't think what else we could have done.

b. I was just thinking what a lovely time we had yesterday.

c. He was trying to think where he'd seen her before.

d. I couldn't think where I'd left my keys.

3. 他動性に見られる類像性

言語表現は現実世界を映していると思われるところがある。自然界で或るモノが或るモノに働きかける場合、直接働きかける場合と間接的に働きかける場合とでは与える影響がかなり違う。他動性に関して例を挙げれば、ビリヤードではキューを使って球をはじくが、そのキューの活動エネルギーはキューが直接当たる球にいちばん強いエネルギーを伝えて球を動かし、そしてその動いた球が当たる次の球は最初の球ほどエネルギーを受けないので動く勢いが弱くなる。つまり、モノはエネルギーを発する源からいちばん近い位置にあるとき、そのエネルギーをもっとも強いかたちで受け止め、別のモノが介在して間接的な働きかけを受けるときはそれよりも弱い影響しか受けないのである。

実は、このような自然界における出来事は、ことばの世界においても類似性を有するかたちで表現されることがある。つまり自然界での出来事は、類像性 (iconicity) をもって言語記号化される場合があるということである⁶⁾。上で挙げたビリヤードの例で起こっていることは、<キューの動き (= 突く

6) ここでの類像性とは、記号が表す意味 (概念) との間に直接的あるいは間接的に類似性 (similarity) が認められることで、たとえば、複数の出来事がそれに対応する複数の文で描写されるとき、その文が出来事の継起順に S_1 , S_2 , and S_3 のように言語記号化されれば、出来事の順序とそれに対応する言語記号の並び方の間には、順序が同じという類像性があると言える。

行為) > が < 球 > に直接働きかけて球を動かすことであり、両者には < 直接的隣接関係 > が存在する⁷⁾。そしてこの < 直接的隣接関係 > はことばとして形の上でも表れている。それは、キューの動きを表す動詞とその動きが向かう目的語とが、VO という < 直接的隣接関係 > を有するかたちで記号化されていることであり、この語順こそが動詞の表す意味が目的語に直接働きかけることを保証していることになる。そしてそれが意味しているのは、動作・活動が対象にたいして直接、すなわちもつとも強烈に働きかけるということである。つまり、VO と構造化されて V と O の間に何も介在するモノがないことによって、動詞のもつ < 働きかけ > という他動性が、なんの邪魔も受けずに直後の目的語にまともに向かうことが表せるのである。

さらにビリヤードの例で続ければ、キューが当たった最初の球が転がって次に当たる球はキューから間接的な働きかけしか受けず、そのためその球は最初の球ほど強い作用・影響を受けることがない。最初に当たった球が、キューから発したエネルギーが二番目の球にそのまま伝わるのを邪魔する障害物となってしまうため、二番目の球は最初の球ほど転がらないのである。そして、この間接的な働きかけという出来事を言語形式で表すと、V と O の間に邪魔するかどうかで何か言語要素が挟まった VXO (X は前置詞や名詞句などの文法カテゴリー) という形式にすればよくなる。これで、X が V の作用する力を O に直接及ぼさなくなることが担保される。

このように、他動性に関しては、自然界における出来事とその言語表現との間の類像性には2種類あり、ひとつは働きかけとその対象との直接的な隣接関係で、もうひとつは働きかけとその対象との間に別の対象が介在した間接的隣接関係で、前者は VO として、後者は VXO として言語化されるということである。

3.1 目的語にたいする直接的/間接的働きかけ—前置詞の有無による意味の違い

以下で順に見ていくことになるが、ここで形式上、動詞と目的語とが直接的隣接関係にある、すなわち両者の間に前置詞などの言語要素が介在していないことが、動詞のもつ意味が目的語にたいして < 直接的に働きかけること > を表す上で大事なこととなる。例えば、(29a) のように言えば、V と O とが隣り合っていて V の表す行為が O に向かって直接的に働きかけることを表すこととなるため、蹴った足がボールに接触してボールが飛んでいったことを意味する。つまり、実際に起こる「蹴った足がボールに当たってボールが飛んでいく」という出来事と VO という言語記号との間には類像性が存在し、V と O の間に何も介在しないことが、蹴る行為がまともにはボールに向けられて足がボールに接触することを保証していることになる。

- (29) a. He kicked the ball. (Dixon 1991: 279)
 b. He kicked at the ball. (ibid.)

一方 (29b) になると、前置詞 at を挟んで V と O が隣接しないかっこうになっていることから、いわば

7) キューが当たった球が次に別の球に当たった場合は、この二番目の球とキューとの間には < 直接的隣接関係 > はないこととなる。

そのatが動詞の意味が直接Oに及ぶのを防ぐ緩衝材となるため、<蹴る>行為が直接ボールに向けられなくなる。その結果<蹴る>行為が向かうのはatということになり、そうするとatのもつ<点>という意味がハイライトされてくる。そしてこうした情報を手がかりとし、さらに<蹴る>行為と<ボール>にまつわる背景知識に基づいて、結局ボールは<標的>であるに過ぎないという解釈となり、必ずしも足がボールに接触した(当たった)とは限らないという意味になる。それゆえ、次の例のようにatが挟まれている場合は、それが動詞の作用を邪魔して目的語に直接働きかけることが保証されるとは限らないので、相当程度に長い時間を掛けて扉を目がけて蹴り続けなくては扉を蹴倒すだけの影響を与えることができなくなる。ここにも、「蹴る行為が対象に直接働きかけるわけではない」という事実と、VとOとの間にVがOに直接働きかけるのを妨げる働きをする前置詞が介在している言語構造との間に類像性のあることがわかる。

(30) He kicked at the door for twenty minutes and eventually he did kick it down. (Dixon 1991: 279)

以下に類似した例を挙げておく。

- (31) a. *John shot the elephant, but he missed it.
 b. John shot at the elephant, { but he missed it / and he hit it }.

(31a)の前半ではVの直後にOが来ているので、(主語と)動詞の表す行為が直接ゾウに働きかけ、弾が当たったことを意味している。しかし後半では当たらなかったと否定しているため、文の前半と後半で意味していることが矛盾してしまい容認されなくなる。しかし(31b)では、前置詞が介在しているためゾウにたいして直接影響を及ぼすことがなくなり、ゾウが標的となったというだけの意味しかなくなる。よって、当たる場合もあるし当たらない場合も出てくることとなるので、文の前半と後半とでは述べている事が矛盾せず文は容認される。

動詞と目的語とが直接の隣接関係にあるVOという形式が、OをVの意味する力をまともに行使する直接のターゲットとしているということは、つぎのような結果構文にも顕れている。

- (32) a. John shot the elephant dead.
 b. *John shot at the elephant dead.

(32a)では動詞がその直後に目的語を従えていることから、弾丸が標的に当たり、その結果ゾウが死んだということを意味する。それにたいし、(32b)ではVとOの間に前置詞が挟まれているため、Vがゾウに直接作用することはなく、代わりに動詞の意味はatに向けられ、atのもつ<一点>という意味がハイライトされる。こうなると、ゾウを目がけて撃っただけということの意味するから弾が外れることもある。それなのに結果構文をとって、「弾が当たらないときもあるのにゾウは死んだ」と言うから意味が通らなくなってしまう。ここにも、VとOの間に何も介在していないVOという形式が、VのOにたいする<直接的働きかけ>を意味し、一方何か介在していればそれが直接的な働き

かけを妨げる作用のあることを意味するという、特定の形式が特定の意味と結びついていることを示している。

ここで (32a) のような結果構文について言い添えれば、結果構文が表す対象は、動詞の力がまともにも目的語に働きかけるから強い影響を及ぼして目的語が変化する出来事なのであるから、この動詞のもつ＜直接的働きかけ＞による影響力は、VO という形式で表すのがもっともコンパクトな表現として相応しいことになる。結果構文がSVOCとして構文の一部に、働きかけが対象にたいして十分に働くことを類比的に意味するVOという連鎖をとるのは十分有縁性 (motivation) のあることである⁸⁾。さて、(29)と同様の例に戻ろう。

- (33) a. She bit the apple. (Dixon 1991: 279)
 b. She bit on the leather strap. (ibid.)

(33a) は動詞の直後に目的語が来ていて、＜噛む行為＞がまともにもリングに向けられることを意味しているので、Dixon (1991: 279) の言うとおり「リングの一部が噛み取られた」と解される。しかし同じbiteを用いても(33b)のように使われると、革紐が食い千切られることはない(ibid.)。革紐は昔、女性がお産のときの痛みをこらえるときや、深手を負ったカウボーイが麻酔なしで傷の縫合を受けるときに歯を食いしばって激痛を我慢するときや、それが噛み千切の対象ではなかったからである。それゆえVとOの間に＜表面への接触＞を意味するonを挟み、革紐の表面をハイライトしてそこを＜噛む行為＞のターゲットとすれば、表面だけが歯の当たるところであるという意味にしかならないためびったり来る⁹⁾。

同じように次も、動詞の表す活動が対象に直接働きかけることを表すためにその対象であるOをVの直後に置く例である。

- 8) さらに付言すれば、force someone to do somethingのような不定詞構文も、元々前置詞であったtoが＜向かって行く方向＞を表し、当該不定詞構文の言語形式が＜動詞が人に働きかけ、その人が影響を受け、不定詞の原形で表される行為を行う方へ向かわせる＞という意味を表しているものと考えれば、このような不定詞構文は結果構文のネットワークの一部を構成していると言えよう。
- 9) bite on the appleとなると動詞の働きかけがまずonに及び、次にonの＜(表面への)接触＞の意味の力を借りてbiteの働きかけがリングに向かうという意味になり、歯が作用する対象がリングの表面だけであることがハイライトされる。もちろん、＜噛む＞行為を遂行するには歯がリングの中に入り込むこととなるわけであるが、onの意味が深部へと食い込む解釈を妨げ、リングの実の表層部が噛み取られると解釈される。＜噛む＞行為が直接＜リング＞に向けられる(33a)だと、リングがbiteの直接的対象となっているので、行為がリング全体を対象としてまともに向かう様が喚起される。両者とも食用としてのリングが関わっていることから、結局のところ、＜apple＞と＜bite＞という概念にまつわる経験的知識を手掛かりにして、「一部ないしは全部にかかわらずリングを食べる」ということを意味するようになることに変わりはないが、biteの直後に何が来るかということで、ハイライトされる対象が違うため、想起される内容が異なってくる。言語形式が異なるのであるから、多かれ少なかれ、意味も違ってくるということである。

なお、bite into the appleとなると動詞の働きかけがまずintoに及び、次にintoの＜内部に入り込む＞という意味の力を借りてbiteの働きかけがリングに向かうという意味になり、歯がリングの表面からさらに中にくい込む様がハイライトされてくる。

- (34) a. They climbed the mountain. (Dixon 1991: 281)
 b. They climbed up the mountain. (ibid.)

(34a) だと、山が動詞の直後に来ていることから<登る>行為が山にたいして直接的な働きかけをした、すなわち全力で登山したことを意味している。全力で挑んだということは、Dixon (1991: 281) が言うとおりに、登山が困難だからこそで、そこまでして登りたいのであれば当然目指すは山頂であろうから頂上を征服したものと解釈される。しかし (34b) だと、山頂に到達したかどうかはわからない。動詞の直後に *up* が挿入されているため、<登る>行為は *up* を直接対象とする。したがって、その前置詞のもつ<上方向>という意味がハイライトされ、登山の結果 (少しでも) 上に向かって登ればよいことを意味するようになる。つまり、コンテキストなしで発話されると、「登頂したかどうかははっきりしないことになる (ibid.)」。

次に、(35) の容認性が落ちるのは、登る対象がエベレストだからで、ふつうは世界でいちばん高い山に登るのは登頂が目的であり、そのためには全力を傾けて登攀しなければならないのに *up* が挿入され、少しでも高く登れば良かった、という意味になってしまうからである。

- (35) ?They climbed up Everest. (Dixon 1991: 281)

一方、登る対象が困難なものでなかったら行為の遂行に全力を尽くす必要がないので、動詞の働きかけが対象に直接及ぶことを表す VO という形式は避けることとなり、次のように *up* を挿入すればよい。

- (36) We climbed up the little hill in the south-east corner of Regent's Park. (ibid.)

3.2 自動詞性の高い動詞の他動詞的用法

次に、ほとんど自動詞としてしか習うことのない例を挙げよう¹⁰⁾。イギリス海峡を泳いで渡るのは達成するのが大変難しいことであるが、それを成し遂げたとき、(37a) のように表すのが自然である。幅の広いところでは200キロ以上、狭いところでも30キロもある海峡を泳ぎ切るには死にもものぐるいで挑まなければならない。したがって、他動性をもっとも強く表現できる形式、すなわち、<泳ぐ>行為がストレートに海峡に働きかけを行うことを示すことのできる VO という (37a) の形式を用いて困難さに立ち向かうことを表さなければならなくなる。こうして、英仏海峡を泳いで渡ることが力を振り絞って成し遂げられた快挙であるとの的確に表現できる。(37b) のように言っても同じ事実を言い表せるが、出来事への見方が違ってきて、「偉業を達成した」ことへの驚嘆が表現されなくなってしまう。

- (37) a. She swam the English Channel. (Dixon 1991: 281)

10) 中学・高校英語レベルでも、いわゆる能格動詞 (ergative verb) を含め、*break* (壊す・壊れる)、*change* (変える・変わる)、*dry* (乾かす・乾く)、*improve* (改善させる・改善する)、*stop* (止める・止まる)、*drop* (落とす・落ちる) などのように、自動詞・他動詞の両用法動詞が出てくるが、ここでは、主たる用法が自動詞構文に現れる動詞を取り上げる。

b. She swam across the English Channel.

逆に、懸命に向かうまでもなく容易に達成してしまう出来事にたいしては、〈泳ぐ〉行為を直接対象にぶつける必要がないため、〈働きかけ〉とその〈対象〉にまともに向かって影響を及ぼさないようクッションとなる前置詞を挟んだ次のような表現が自然である。

(38) She swam across the millstream.

(ibid.)

少し類例を挙げておく。高さ1.5メートルの柵を飛び越えたりする、かなりの跳躍力を要することはだれでもできることではないため、成功させるためには全力でむかわなければならない。この全力で対象にむかう直接的働きかけは、VOという直接的隣接性を表す言語形式に対応している。よって(39a)のような構造をとることで対象にすべての力をぶつける真剣さを表すことが可能となるのである。反対に、(39b)のように容易に飛び越えることのできる場合は、対象に直接働きかける必要がないため、(39a)と同じ構造をとってしまうと容認されなくなってしまう。容認されるようにするには、前置詞overを挟んで障害物をつくり、飛び越える力がそのまま直接対象物に及ぶことのないようにすればよい。

(39) a. She jumped { the six-foot fence / the wide ravine }.

(ibid.)

b. *She jumped { the snail / the ten-inch gap in the path }.

(ibid.)

さらに一例、ポリオに罹った後遺症のために足が不自由になったオーストラリア人作家が著した自叙伝のタイトルの例を加えておく。ベストセラーとなったこの本は書名が*I can jump puddles*で、動詞の直後にoverがないのが目を引く。なぜ目を引くかと言えば、ふつうの人にとってみれば、雨でたまった水たまりを飛んで越えるのはたやすいことだから、「おや、なんで水たまりを越えるのに*I can jump over puddles*となっていないのだろう」と不思議に思うからである。しかしoverがないことには理由があり、Dixon (1991: 282)は、水たまりを越えることは足に障害を抱える著者にとってみればたいへんなことを成し遂げること(a significant achievement)を意味するのでoverが省かれていると説明する。その通りである。水たまりといえども力一杯跳躍しないと飛び越すことができない人にしてみれば、本論の線に沿って言い換えれば、越えるためには全エネルギーをその水たまりにむかってぶつけなくてはならず、その〈跳躍することの直接的働きかけ〉を類比的に言語化するには、VがOとの間にエネルギーの伝達を妨げる前置詞overを挟まず、直接隣接するVOという言語形式にしてやらなければならない、ということである。

最後に、大学受験にもけっこう出題される例を付け加えておく。自動詞性の高いtalkが他動詞として使われているほかの例は(27)に挙げておいたが、もっと身近な例として、(40)や(41)のように、talkがいわゆるイディオムとして、すなわち、それを構成している単語の意味を足しても生まれることのない独自の意味を持っている構文として教えられているのは知られている。

(40) a. We talked her into going out with us.

- b. He's against the idea, but I think I can talk him into it.
- (41) a. She failed to talk her husband out of smoking.
b. I'm quitting, and there's no way you can talk me out of it!

自動詞（構文）と他動詞（構文）の本質的な意味機能の違いと、その二つの間に潜む段階的関連性、つまり他動性と自動性とが典型性に支えられた概念であることがあまり理解されていないため、ほとんどの英語教師が、(40) や (41) のような例あるいは *Don't talk nonsense!* のような例を、典型的な他動詞である *kill a fly* のような例と関連づけて教えることがないと思われる。しかし、両者には VO という連鎖をとることで共通性があり、その連鎖形式が $V \Rightarrow O$ 、すなわち目的語にたいして直接、まともに働きかけるという意味を有しているから、問題の構文が、目的語が影響を被って変化するという意味になることにも目を向けさせなくてはならない¹¹⁾。

ちなみに、次のような例で前置詞が挿入されると容認されなくなる。

- (42) a. They talked (*to) him into buying the house.
b. He pounded (*on) the metal flat.

これは、働きかける対象に変化が生じるほどの影響を与えるためには、前置詞を介在した間接的働きかけでは対象に十分力が伝わらず、直接、もろに力をぶつけて影響力を行使することを表現できる VO という構造にしなければならないからである。

さらに、動態構文 (conative construction) の接触・打撃動詞と変化動詞との間に容認性の違いが見られることが知られているが、違いをもたらす原因は何であろうか。鍵となるのは、両者の意味構造の違いである。(43) に現れるような接触・打撃動詞は、働きかける対象に必ずしも変化をもたらすとは限らないという意味構造を有する。それゆえ、(43b) のように言っても、机に傷が付いたかもしれないし付かなかったかもしれないという意味になる¹²⁾。一方、(44) に現れるような変化動詞には、その意味

11) 実は、本来は導入の順序が逆であり、他動詞を指導するようになった段階で、いわゆる自動詞構文 (SV) と他動詞構文 (SVO) という構文自体が自動性/他動性に関して独自の意味を有していることが教えられなければならない。

ちなみに、(27) でも挙げた *talk nonsense* の意味が *talk about nonsense* と相当異なるということはここまでの説明で感得されよう。前者は、＜双方向のやりとりを前提にして話す＞という *talk* のもつ意味を「ばかげたこと」にたいしてストレートに向ける、つまり「まともに・真剣に話す対象とする」ことになるので、内容のあるやりとりを期待している一方の当事者としては怒りたくなって発する表現である。後者は「ナンセンスについて（あれこれと）語る」という意味である。

12) 必ずしも対象に変化を起こすとは限らない接触・打撃動詞であるが、それが変化をもたらすだけの力を行使できるようになるには、働きかける力が直接素直に対象に接触しやすくなるよう VO という型をとればよい。

(i) He pounded the metal flat.

しかし、＜働きかける力＞を内面的にもっているにもかかわらず、敢えて緩衝材となる前置詞を挟んでしまうと、その力が弱まり、結果構文をとれなくなってしまう。

(ii) *He pounded on the metal flat.

構造自体に〈働きかける対象に変化をもたらす〉という固有の意味が内在化されている。したがって、その意味を実現するには、結果構文と同じく、動詞の働きかける力が直接対象に作用することを保証するVOという形式をとらなければならないのである。それにもかかわらず、動詞の影響力を弱める緩衝材となる前置詞が挿入されてしまうと、対象にたいして直接影響を及ぼすことができなくなり、その結果、変化動詞としての特性である〈変化を起こす〉ことができなくなってしまう。こうして、変化動詞は前置詞を挟むと、その内在的意思を実現することができないがために容認されなくなってしまうのである。

- (43) a. He kicked (at) the dog.
 b. He pounded (on) the desk during his speech.
- (44) a. She broke (*at) the vase.
 b. The farmer grows (*at) potatoes.

4. 他動性が関わるそのほかの現象

前節までで、動詞とそれが作用する目的語とが直接隣接している形式が他動性の実現力を保証しているということから、VOという形式上の連鎖自体が〈直接的な働きかけをする〉という意味を、そして動詞と目的語との間に前置詞などが介在するVXOという形式が〈間接的な働きかけをする〉という意味を有することを見てきた。ここでは、前節までで取り上げなかった事象を示し、そこでもまた同じように、他動性が介在する出来事と言語記号との間には〈直接的隣接関係〉による類像性のあることを見ていきたい。

次のような対の意味を考えてみよう。

- (45) a. I [_V struck] [_O John] on the head.
 b. I [_V struck] [_O John's head].

両者とも殴られた箇所が首から上であるという点では同じ意味であるが、動詞の直後に来る目的語が異なっていることから働きかけの向かう先が違い、その結果として影響を被る程度が異なってくるのである。(45a)はジョンが動作の作用を受ける直接対象であるため、殴られたのが顔であってもジョンそのものが全体的に影響を被ったという意味となり、(45b)はジョンの顔だけが影響を被る対象となっていて、例えば痛みやショックがジョン自身の全体に及ぶという意味はない。(46)も同様の例であるが、ふつうは(46a)ではジョンは王であるが(46b)のジョンは臣下である。なぜならば、女王自身に直接の影響を及ぼすようなかたちでキスができるのは王だけと考えるのがふつうだからである¹³⁾。

13) ジョンが王でなかったとしたら、王と同じほど強い影響を与える様なキスをする人物となると、それは不倫関係にある男性ということになってしまう。

- (46) a. John kissed the queen on the hand.
b. John kissed the queen's hand.

ただ、(45) (46) と同じ構文なのに、対の一方が容認されない場合もある。

- (47) a. *I shook John by the hand.
b. I shook John's hand.

握手をするときは、ふつう、握る対象となるのは手であり、そこだけに影響を与えれば挨拶は済むので、相手の体全体をターゲットして揺り動かす必要はない。よって、動詞の直後に相手の手を従える (47b) でないと儀礼上の行為としての挨拶をしたということが正しく伝わらない。

次の対では、(48a) のほうはVの直接対象が「彼が無実であること」であるからそのことが話し手の<断言する>対象である、すなわち「彼は無実だと私ははっきり言っておく」という意味になる。それにたいして、(48b) のほうはhimがdeclareの対象として影響を受けることが言い表されている。そして(48b)の発話を耳にした聞き手は、<断言行為>と<無実>という概念にまつわる背景的知識(常識)を元にして、その文の発せられた状況や発話者について、もっともらしい解釈ができるよう辻褃合わせを行うことになる。すると、人にたいして直接無実であることをはっきり述べることでできる資格を有する人物は判事であり、それを直に相手に伝えるのは法廷の場であることに辿り着き、結局、「無罪であることを判事が言い渡している」という意味を正確に読み取れることとなる。

- (48) a. I [_V declare] [_O that he is innocent].¹⁴⁾
b. I [_V declare] [_O him] innocent.¹⁵⁾

類似した例として (49) が挙げられる。

- (49) a. She asked that he leave.
b. She asked him to leave.

14) この文でheがdeclareの直接働きかける対象にならないことは、heがいわばthat節という「砦(城)」に守られているからであると言える。ここにも、言語記号と意味概念とが類像の関係にあることが読み取れよう。

15) him innocentという連鎖が[_O him innocent]のようにひとつの統語的構成素あるいは意味成分(単位)と分析される可能性も否定できない。この場合、そのまとまりが全体としてdeclareの直接働きかける対象となっていて、しかもその連鎖が隣接していることが、ひとつのまとまりとして密接な関連性のあること、すなわちhimとinnocentとが切っても切れない関係にあること(innocentがhimの一時的属性であること)を類像的に表していると解釈することとなろう。なお、このように分析したとしてもhimが目的格となっていて動詞に隣接していることに変わりはないので、それが動詞の直接的働きかけを受けるという意味になる。

(49a) は *he* が *that* 節という「砦」の中であって守られているため *ask* が直接働きかけることができず、それでふつうは「彼女が人を介して彼に頼んだ」という間接的要請を表すこととなる。一方 (49b) は、*him* が動詞に隣接しているため、「彼女が自ら彼に頼んだ」ことを意味する。

同様に、(50a) は椅子が<判る>ことの間接的対象であるため、椅子について話者自らが椅子を触ったり腰掛けたりした情報に基づいてではなく、例えば家具を紹介する雑誌などから得られた間接的情報を基にして「座り心地がよい」と言っている。椅子に座って座り心地を試して言う場合は (50b) を用いる。では (50c) はどのような状況で発せられるかと言えれば、それは類像性の顕現という観点から見れば、前置詞 *to* が鍵を握っていて、結局、直接試したあとしばらく時間が経ってから¹⁶⁾、「やっぱりこの椅子は座り心地がいいや」という判断に至った場合に使われるということである。なぜならば、不定詞の *to* は元々前置詞であったため現在でも<方向に向かう>という意味があり、そのうえで<判る>という認識活動が椅子に向けられ、そしてその椅子にたいする認識が至る方向を *to* が示し、認識した結果を *to* 以下で「心地よい」と示しているからである¹⁷⁾。

- (50) a. I find that the chair is comfortable.
 b. I find the chair comfortable.
 c. I find the chair to be comfortable.

次の表現は、謝罪や感謝の気持ちが表明された際に「もういいよ」「気にしないでいいから」という意味で、あるいは「うるさいなあ」と思う事にたいして「もういいだろう」「そんなことどうだっていいだろう」と言いたいときに使われるが、意味はどのように違うのであろうか。

- (51) a. Forget it!
 b. Forget about it!

ここにもやはり、動詞の作用が向かう対象にたいする<直接的隣接関係>の有無が意味を微妙に分けている。(51a) では動詞に目的語が直接隣接しているため、<忘れる>という認知作用が直接 *it* に働きかけ、その存在そのものを忘れることを意味し、(51b) では<忘れる>ことが直接 *it* に向かうことを阻止する前置詞があるため、その前置詞の意味である<周辺>が前景化され、*it* そのものではなくそのことに関する事、例えば「そのことが原因となってくよくよしたりするようなこと」が<忘れる>対象となる。

さらに付け加えたいのは次の *rethink* の用例である。

16) *to* が「時間が経過してからの結果状態」を表す例としては次のような文がある。

(i) The hunter knifed the bear to death.

17) しかし、この *to* の用法を *declare* の例と関連づけて言えば、判事が判決を言い渡すときは、‘I declare you to be innocent.’ とは言わない、ということである。陪審制の下では判事自身が有罪か無罪かを決めることがないため、判決を言い渡すのに時間が掛かることはないからである。

- (52) a. You should rethink { a plan / an approach / (a) strategy / an attitude / priorities }.
b. This unprecedented situation challenges us to rethink all our ideas.
c. The Royal Family must now rethink its attitude to marriage.
d. We need to rethink our way we consume energy. Take, for instance, our approach to transport.
e. I think we may have to rethink our policies fairly radically.

この動詞は、ふつうは、その意味する〈思考活動〉が向かう対象の前に前置詞をとらない。re-という接頭辞は〈再び、さらに、新たに、……し直す〉という意味をもっていて、それが付く動詞の表す意味の度合いを増す働きを有する。そうすると、rethinkとなれば単にthinkで表される〈思考活動〉がもっとも集中性を高めることとなるわけであるから、その〈集中的思考活動〉という意味を実現するためには、思考活動が邪魔されることなくストレートに対象に向かって行く必要があり、それゆえ、rethinkとそれが働きかける対象との間に前置詞を挟まずにVOという形式となって表れるということである。thinkの活動の度合いが高まったrethinkはconsiderと同じような意味をもつのであるから、considerとreconsiderが対象にたいして向ける思考活動の真剣さを表現するために前置詞をとらないことによって、〈直接的隣接関係〉を類像的に表すVOという形式をとるのと同じである。

最後の例として、二重目的語構文を挙げておく。周知のように、この構文は前置詞をとる与格構文と書き換え関係にあると教えられてくることが多かったが、両者の間には意味のズレのあることが知られてきている。では、どうして意味の違いがもたらされるのであろうか。ここでもやはり、動詞の直後にどのような言語要素が並べられるのかということが鍵となっている。(53)が示すことは、前置詞付与格構文の場合は送ったものが届いても届かなくともよいということである。

- (53) a. Ken sent a gift to Ann, and she received it.
b. Ken sent a gift to Ann, but she didn't receive it.

しかし次が示すように、二重目的語構文になると、送られたものは受け取られたという意味しかなくなる。

- (54) a. Ken sent Ann a gift, and she received it.
b. *Ken sent Ann a gift, but she didn't receive it.

(53)で動詞の直後に来て隣接関係を結んでいるのは贈り物である。よって、これが〈送る〉行為が働きかけて直接的影響を受ける対象となる。しかし、ものを送ったとしてもそれが途中で紛失するような場合もあるため、必ずしも受取人のところに到着するとは限らない。このことは、単に〈向かう方向〉しか表さないto¹⁸⁾が用いられていることにも表れている。それゆえ、(53)の文は前半と後半で矛盾す

18) 前置詞toが必ずしも到達点を表すとは限らないことは、次のような例から示される。

- (i) John threw the ball to the catcher, but the throw went wide.
(ii) Bob told a story to Joe, but he wasn't listening.

ることを述べていないため、ふたつとも成立する。一方、(54)で動詞の表す行為の直接的働きかけを受けるのはアンである。そして人がものを送るとき、それが送り相手に届くことを目的として送るのは明白である。したがって、〈ものを送る〉行為の対象が(54)のように人であれば、その人は当然受取手ということになり、さらにその人が動詞の直接的働きかけを受ける、すなわち影響を受けるということは、〈送る〉行為の目的が達成されたことを意味する。それゆえ(54a)の後半で「受け取った」と言っても前半と矛盾することはない。一方、(54b)のほうは、前半で「受け取った」と述べているにもかかわらず、後半では「受け取らなかった」と、前半で言っていることと矛盾を来すこととなってしまう、容認されないのである。こうしてここにも、VOと並ぶ形式に、Vのもつ意味がその直後に隣接するOにたいして直接的、全面的に働きかける意味のあることが示された。

5. おわりに

日本人英語学習者にとってもっとも習得が難しいのは冠詞と前置詞であるとよく言われてきたが、本稿では、しかし、それ以外にもスル的言語である英語では、他動性という概念がいろいろな文法現象の中に現れ、しかもそこには或る一定の意味の特徴、すなわち、VOと並べられた形式はVの表す意味がその直後に隣接するOにたいして直接的、全面的に働きかけるという、現実世界に起こる出来事との類似関係にあることを、少ない例ではあるが具体的に見てきた。そうした考察のまとめとして、(26)と類似した次の例を見て本稿を閉じたい。

(55) A: He's a terrible driver.

B: Look who's talking!

(56) a. I'm lazy? Look who's talking!

b. 'She drinks too much, that's her problem.' 'Look who's talking!'

c. 'I wish Kate would be on time for once.' 'You do? Look who's talking!'

動詞の表す意味が直後の目的語にたいして直接働きかけるというのがVOという連鎖形式(構文)がもつ独自の意味であることから、(55)はlookの〈意識して視線を向ける〉という行為が目的語であるwho's talkingに直接的に向けられるのであるから、通常よりも意図性が強く、視線の向け方も真剣なものになってくまともに注視する〉ことを意味するようになる。したがって、Aが「あいつ運転へたくそだな」とけなしたところ、Bが「誰がそんなこと言っているのかよく見てごらん」と、つまり「何言っているの。そういうおまえだって自分のことを棚に上げて、人のことをよく言うよ、そんなふうに見える自分じゃないだろ」と、たしなめていることになるのである。ここで仮にBが次のように言ったとしたら、Aに対する非難の程度が弱くなり、問題の状況では不適切な表現となってしまう¹⁹⁾。

19) (57)のように、look atと疑問詞との共起が文法的に容認されないわけではないことは、次のような例によって示される。

(i) I turned to look at who it was.

(ii) From there we also looked at who we would approach and what methods we would use to make contact.

(57) B: Look at who's talking!

前置詞 *at* を挟んで *V* と *O* が隣接しないようになっているので、*V* の直接的な *O* にたいする働きかけができず、〈意識的に視線を向ける〉行為が直接 *O* に向けられなくなる。その結果 *look* が向かうのは *at* ということになって *at* のもつ〈点〉の意味がハイライトされてくる。そうすると、視線の向けられる先が *O* の単なる〈標的〉であるに過ぎないという解釈になり、「視線が向けられたけれど標的に接触するとは限らない」という意味になる。それでは、*A* のことをたしなめるといふ *B* の狙いが達成される保証がなくなってしまう。こうして、自動詞性の高い *look* であっても、*VO* という他動詞構文の枠にはめ込むことによって他動詞性を身につけることができるようになり、上述した状況で話者が言い表したい、適切な表現が可能となるのである。*VO* という形式が存在するおかげである。

参考文献

- Bolinger, D. 1977. 'Transitivity and Spatiality: the Passive of Prepositional Verbs', in Adam Makkai, Valerie Becker Makkai and Lugi Heilmann (eds.), *Linguistics at the Crossroads*. Jupiter Press.
- Cureton, R. D. 1979. 'The Exceptions to Passive in English: A Pragmatic Hypothesis', *Studies in the Linguistic Sciences* 9 (2), 39–53.
- Dixon, R. M. W. 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford University Press.
- Givón, T. 1993. *English Grammar: A Function-based Introduction II*. John Benjamins Publishing Company.
- Haiman, J. 1980. 'Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation,' *Language* 56 (3): 515–40.
- Takami, K. 1992. *Preposition Stranding: From Syntactic to Functional Analyses*. Mouton De Gruyter.
- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理 対照言語学的研究』大修館書店.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦. 1991. 『〈英文法〉を考える—文法とコミュニケーションの間』筑摩書房.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版.
- 府川謹也. 2004. 「英語の与格構文と二重目的語構文について」『獨協大学英語研究』第59号：171–227.
- 府川謹也. 2005. 「与格交替における動詞/前置詞の意味と構文の関わり合い」『言語研究の宇宙：長谷川欣佑先生古稀記念論文集』316–328. 開拓社.
- 府川謹也. 2011. 「前置詞 'to' の多義性—推論の役割」『Encounters (獨協大学交流文化学科紀要)』第2号：75–98.

■
府川 謹也 (Fukawa Kin-ya)

所属：獨協大学外国語学部交流文化学科教授

専門：文法論・意味論

Email：v00v@dokkyo.ac.jp